



古倉宗治／著

成功する自転車まちづくり

～ 政策と計画のポイント ～

A5版 246頁 定価¥2,800 (税別)

発行所：(株) 学芸出版社

〒600-8216 京都市下京区木津屋橋通西洞東入

TEL 075-343-0811

ISBN978-4-7615-2491-3 2010年発行

[評者] (株)クボタ 水・環境総合研究所 あべ せいいち 阿部 清一

2,800円！おっちょっと高いな、というのがこの本の裏表紙を見た印象。

表題は「自転車まちづくり」、その前に「成功する」が雲マークつきで入っている。

著者の視点から今まで、あまり成功していない自転車によるまちづくり、をこの本で成功させるのだ、という強い意欲を感じる。

著者の主張は「自転車の効用が環境に対してエコであるということと健康によい、ということがよくメディアに取り上げられている。また自転車は市民にとって身近なものなので、自治体も容易にテーマに採用し、例えば駅周辺に駐輪場を整備したり部分的に自転車専用道路をつくったりレンタサイクルを行ったりしている。しかし、それらの対策をあまり考えずにやっているため、結果として自転車利用が盛んになったり持続性を持った交通手段として活用されたりするような成果が得られていない。すなわち「自転車まちづくり」ができていない。

真の意味で自転車のメリットを活かした「自転車まちづくり」をするには、自転車を根本から理論的に見直し、理解してもらうことが大事であり、結果としての施策は、「自治体が、ではなくまず国が行うべき。」というものである。

本書は序章、終章を含め7章構成で「理論的に理解してもらう」ことから、とにかく内容が豊富、かつ説明には綿密な調査やアンケートなどで得られた写真、図、表がふんだんに使われ、定量的で非常にわかりやすい。

例えば第1章 自転車利用のメリットでは、交通手段として0.5km以内は徒歩、0.5kmから5kmは自転車、バスなど公共交通は2km以上、車は他の手段が利用できない場合の5km以上に利用するのがよいと種々のデータで説明している。生活習慣病に対する自転車活用の効果としては、コペンハーゲンの4万人の疫学データから、自転車を利用せず通勤している人は自転車利用通勤者に比べて死亡率が39%も高い、と紹介している。本書を読み進んでいくと自転車を利用しないのはなんとなく罪悪であるとの意識をもってしまう。

本書で著者が最も読者に訴えたいことは副題に「政策と計画のポイント」とあるように自転車利用総合計画のススメである。第5章 わが国の自転車政策および自転車計画とその策定方法、に詳しく解説されている。自治体の自転車交通関係者にぜひ一読を薦めたい。